



聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「地域を支えるお母さん」

た なべ てつ こ
田辺 哲子

1912年(大正元年)
新潟県三条市生まれ
東小岩在住



100年前に生まれました

わたしはね、今年100歳になります。「長生きのコツはなんですか」とよく聞かれるけれど、そんなものはありません。牛乳は嫌い、かぼちゃは嫌い、とにかく栄養になるようなものは全部嫌いなんです。夜中までテレビを見たり、本を読んだり、食事をしたりして、眠たい時に寝る。体操も散歩もしません。

でも考えてみると、主人が戦争中に陸軍糧秣廠で胚芽米の研究をしていたから、いやでも胚芽米を食べていた。主人は平成16年に100歳で亡くなったんですけれど、二人とも食べていたから、それが体に良かったんじゃないでしょうかね。

主人とは、見合いどころか、わたし自身は写真すら見ないままで結婚しました。知り合いが間に入って、写真と反物を持って親のところへ縁談を持って来る。一度は形だけ断って、もう一度持って来たら承諾する。まわりの人もそうやって結婚していました。どんな人か分からないけれど、親の言うとおりにしておけば、離婚してもいつでも実家に帰って来られるくらいの気持ちで結婚したのに、ずいぶん長い間添い遂げましたね。

わたしは、大正元年に新潟県三条市で金物問屋の長女として生まれました。戸籍の名前はテツです。はじめての子を生まれてすぐに亡くした両親が、次の子には強い名前をと、付けたそうです。でも、テツでは男の子に間違えられるので、ずっと哲子。弟や妹も生まれたけれど、わたしは一人目だから「金物問屋のお姉さん」として一番威張っていました。

両親、祖父母、兄弟、その他に番頭さんや女中さん、兄弟の乳母たちも一緒に生活する大所帯でした。跡取り娘だった母は、一番番頭だった父と結婚させられたそうです。

当時は食事をするにもね、店の主人ひとりが、奥座敷に座って食べていたんですよ。祖父が生きている時は祖父。亡くなってからは父が座っていました。その他の家族や住み込みの使用人は、板張りの台所の続き間で個別のお膳で食べていました。夏場の父の食事中は、弟の嫁や女中さんがずっとうちわで扇いでいましたよ。

戦後の弟の時代にはそんな風景もなくなっていたけれ

ど、それが当たり前と思っていた時代があったんですよ。

故郷より田舎な小岩

昭和6年に高等女学校を出た時、得意な英語を活かして通訳になろうと思って、女子大に進学するため叔母を頼って上京しました。でも、3番目の弟が突然亡くなってしまって、すぐに帰郷させられました。子どもを失ったショックで両親が、「なんでも好きにさせてやるから東京には行くな」と言うので、また受験すればいいやと思って。でも、大学はそれきりになっちゃいました。

東京には、主人と結婚してからまた出てきました。糧秣廠の本廠が越中島だったので、小岩に住みましたが、昭和初期の小岩は駅前に四軒長屋があったきり何もなかったんです。ガスも水道もない井戸水での生活で、「三条よりも田舎だね」と母もびっくりしていましたよ。

1男3女に恵まれましたが、主人は各地を飛び回っていてなかなか家には帰って来ることができなかったし、戦争もひどくなってきて、子どもたちと三条市の実家に疎開しました。店は番頭さんも女中さんも誰もいなくなっていて、以前の気持ちはなくなっていました。けれど、物が手に入らなくなってからも、父は「うちが食べられなければ、みんなも食べられないのだから」と疎開してくる人を受け入れて、町内の人にもお酒や食べ物をふるまったりしていました。

終戦時、主人は北海道に赴任していました。本当は、わたしたちも後から北海道に行く予定だったのですが、主人が東京で会社員になったので、知り合いのついでにばらくは埼玉の鴻巣に住みました。そして昭和24年、長女の中学進学を機に小岩に戻ってきたんです。

婦人会の会長に、そして町会長にも

当時小岩では、婦人会の活動が活発でした。消費者運動をしたり、バザー、お料理教室、婦人の地位向上のために映画会まで、いろいろ自分たちで考えてやりました。市川房枝さんの選挙活動もしましたね。わたしも会員として活動をしていました。

ところが、昭和26年一番下の娘が小学校に入学する

時に、当時区議会議員だった小糸喜美子さんから「婦人会の会長をやって」って言われたんです。けれど、会長になるのは嫌だったから「娘のPTAがあるからできない」って断ったら、近所の人が「PTAはわたしがやるから、婦人会はあなたがやって」って言うの。それで「さつき婦人会」の会長になりました。



◆東小岩中央自治会会員の皆さんと
田辺さん(前列中央)

でも、結局はPTAの役員もやることになりまして、子どもにゆっくり歩いていくうちに、子ども会の雑用までやるようになっていました。それから覚せい剤撲滅のための活動をしたり、親が勉強するために生活学校の立ち上げを区に働きかけたり。なんだかんだで子どもたちが大きくなって、子ども関係の活動も続けました。

そのころには町会の役員もやるようになって、一番大変だったのはお葬式ですね。今は葬儀屋さんに頼むけれど、昔は町会でやるから、出かけようとする、「田辺さん、いま誰々さんが死んだから行かないでくれ」って言われるんですよ。主人の実家に法事で行っていた時も東京から電話で「帰ってきてくれ」でしたから、さすがに新潟まで追っかけて来なくてもいいのになって思いましたよ。

今の自宅を建て直した時には、町会や婦人会の人が集まれるようにと、わたしの部屋を玄関の横に作ってね。町会の会館ができるまでは、そこで夜遅くまでワイワイやっていました。わたしは、町会のことや婦人会のことなんかは家族に話さなかったんですが、家族もそんなものだとして理解してくれていたようです。

町会の会館ができたのは昭和47年ころ。東小岩中央自治会は小さな町会だけど、中里区長さんも来てくれて盛大にお祝いしました。当時は副会長だったから、わたしも寄付しました。会館のために毎月少しずつ積み立てしておいたんですけど、主人には内緒でね、「お金なんか無い。毎月大変ですよ」なんて言ってたんです。それなのに「寄付ありがとうございます」ってお礼状が来て困りましたね。

町会長になったのは昭和50年。今は、小岩地区の町会長に女の人が何人もいますけれど、当時はいなかったんですよ。だから、「男性の中に女性がひとりで苦勞したんじゃないか」なんていう人もいますけれど、そんなことはない。女か男かなんて考えたこともなかったですからね。

時代が変わっても

もし、あの時婦人会会長にならなければ、わたしも仕事を持っていたら、今とは違っただろうなと思うこともあります。でも、わたしは、運がいいんだか「女性初」っていう役をたくさんやらせていただきました。小岩地区の自治会連合会の会長、江戸川区少年団体連合会の小岩中部支部支部長と「受け手がないなら仕方ない」で気が付いたら、いろいろしてました。

防火防災協会の常任理事もやっていますが、女の人は都内でも珍しいんだそうです。小岩は防犯運動も盛んですよ。「いつでもだれかがパトロール」という合言葉で、大人から子どもまでが、散歩や買い物なんかのついでに見回りしているんです。わたしは、もう自分ではできませんけれど、防犯週間のパトロールでは、最後の人が巡回から戻ってくるまで、町会の会館に詰めてます。町会長としても居るから、どっちの仕事だかよくわからないですけどね。

町会長になって38年、町会の役割もいろいろ変わってきました。昔は火事、浸水、お葬式というと町会総出で助け合いましたが、時代によってだんだんやり方も変わって、総出で何かをすることも少なくなりました。例えば、葬儀は今は専門の業者を使う人が多いですからね。けれど、相変わらず学校や地区の催しに呼んでくださるので会長の仕事は忙しいんです。

わたしも引退して、そろそろ好きな本でも読みながらゆっくり過ごしたいんだけど、なかなか手がないんですよ。たまにやる気がある若い男の人がいても、お勤めがあるから日中の活動はどうしても難しい。ずっと会長をやってくれる人を探しているんです。でも、引き受けた以上責任がありますし、「ああ、重荷だ、嫌だ」と思ってやっていたら迷惑だから、やっているうちは喜んで、少しでも人のためにと思っていますけれどね。

婦人会会長になって60年、時代も婦人会の在り方も変わりました。会員がいなくなったり、町会に婦人部として吸収されたりと、婦人会は全国的にどんどん少なくなっています。小岩地域も16あったのが、今ではすっかり少なくなっちゃいました。

でも、婦人会は役所や町会のお手伝いの会じゃないのよね。その時々で女の人たちが「あれしましょ。これしましょ」って自分たちで必要なことを考えて活動する場だから、これからも必要だと思っているんです。

「田辺会長が辞めたらさつき婦人も解散」なんて言う人もいるから、まだまだ元気で頑張りますよ。

